

大学女子ハンドボール競技における5対6の数的不利な状況での防御について

松本 彩花 (201211988、ハンドボールコーチング論)

指導教員：藤本 元、會田 宏、山田 永子

キーワード：学生レベル、6対6との比較、印象分析

【目的】

本研究は、大学女子ハンドボールチームを対象に5対6の数的不利な状況での防御と6対6の数的同数の状況での防御との比較を行い、5対6の状況での防御の特徴を明らかにすること、5対6の状況での有効的な防御方法を明らかにすること、今後の指導の際の一指針とすることを目的とした。

【方法】

2015年関東学生ハンドボール女子春季リーグから、5対6および6対6の防御を222シーンずつ用意し、研究対象とした。分析項目は、数的状況、プレー結果、シュートエリア、シュートの種類、パス回数、きっかけ、防御時間、スリースロー獲得数、防御の積極性、牽制活動の回数である。統計処理はカイ2乗検定と残差分析を用いた。さらに、5対6の防御において失点を防いだ場面と失点した場面を5シーンずつ用意し印象分析を行った。

【結果および考察】

1. 6対6の状況との比較からみた5対6の状況での防御の特徴

- ・対戦相手の全攻撃およびセットの攻撃成功率、速攻生起率が高く、ミス率が低い。
- ・対戦相手のロングシュートの割合が低く、攻撃のきっかけはポジションプレーが多い。
- ・最終プレーまでのパス数が少なく防御時間が短い。フリースロー獲得数が少ない。
- ・9mの中で消極的に守ることが多く、9m以上前に出て積極的に守ることが少ない。
- ・牽制をしないで反応的に守ることが多い。

2. 5対6の有効的な防御方法

ミドルシュートおよびロングシュートは、ノーゴ

ールの割合がゴールに比べて有意に高いことから、5対6の状況ではミドルシュートおよびロングシュートを打たせるようにすることが有効であると考えられる。(表1)

また、印象分析の結果から以下のことが明らかになった。

- ・9m内での牽制活動や前後の動きが必要である。さらに、1枚目の防御者の駆け引きが重要である。
- ・ポストをマークしすぎないようにする。
- ・シュートを狙っていないプレーを見極めながら予測的に動く。
- ・ボールに寄り防御隊形をコンパクトに保つ。

【実践現場への提言】

- (1)5対6の状況では、防御隊形をコンパクトに保ち、早めに自分のマークを変更したり、牽制に出るふりをしてわざと下がってミドルシュートやロングシュートを打たせたりするなどの予測的な動きをする。
- (2)5対6の状況での防御においても、2枚目の防御者はセンターエリアの対戦相手に対して牽制活動を行い、1枚目の防御者は2枚目の防御者と連動する。

表1 5対6の状況でのシュート種類とプレー結果との関係

	ゴール	ノーゴール	合計
カットイン	18(27.7%)	9(20.5%)	27(24.8%)
ミドル	5(7.7%)†	10(22.7%)*	15(13.8%)
ロング	0(0.0%)†	4(9.1%)*	4(3.7%)
サイド	24(36.9%)	15(34.1%)	39(35.8%)
ポスト	10(15.4%)	5(11.4%)	15(13.8%)
サイドイン	1(1.5%)	0(0.0%)	1(0.9%)
7m	6(9.2%)	1(2.3%)	7(6.4%)
回り込み	1(1.5%)	0(0.0%)	1(0.9%)
合計	65(100%)	44(100%)	109(100%)

カイ2乗値=14.473, $p<0.05$

*残差分析の結果有意に大きい

†残差分析の結果有意に小さい